

飼料・肥料等高騰対応策—わたしたちの取組— (ver.4)

令和4(2022)年10月
畜産酪農研究センター

資材価格高騰はセンターの牧場経営にも影響が出ております。
抜本的な解決にはなりません、センターで工夫していることや取り組んでいることをお伝えしますので、ご参考にいただければと思います。

1 自給粗飼料を最大量確保する

□牧草は全て奨励品種を栽培しています。(奨励品種の無い牧草は除く。)

□播種適期を遵守しています。

オーチャードは9月13日に播種しました。イタリアンは10月中旬までに播種予定です。

今期一番草の収量増は、昨秋に十分生育していたことが大きいと考えます。

□越夏性のイタリアンを利用しています。

夏枯れもありますが適切に播種すれば周年に近く利用できます。

□窒素肥料を補完するため、永年牧草更新時にシロクロバーを混播しました。



マメ科率が10~15%増えると4~6kg/10aの窒素肥料が節減できるそうです。

(ただし使える除草剤が少ないため、一部試験的に行いました。)

□トウモロコシの播種密度は7,000本/10aを目安に播種機を設定しています。

多少の欠株があっても収量への影響は少ないようです。

牧草は雑草の繁茂を防ぐため、できるだけムラ無く播種しています。

□トウモロコシは効果的な雑草防除を励行しています。

土壌処理はほ場を平坦に鎮圧し、土の乾燥具合で水量を変えています。茎葉処理は雑草の発生を見てそれに合った薬剤を散布します。

2 飼料費節約の工夫

□和牛の経産牛肥育は、専用飼料ではなく、肥育牛の残飼にふすまととうもろこしを加えて飼育しました。飼料費は約2割削減され、成績にも大きな影響はありませんでした。

□ネズミに食われやすい飼料は少量ずつ購入し、ネズミ駆除に力を入れています。

□乳牛では、配合飼料給与量を随時見直し、節約を心がけています。

当面は、搾乳ロボットの回転効率を意識した飼養管理で乳量をカバーし、生産目標が達成できるよう努めています。

□TMR 調整で中途半端に余ったコーンサイレージはパドックで給与するなど、一粒も無駄にせず給与するよう努めています。また飼養牛の計画的な更新で、パドック飼養頭数の削減を行っています。

□養豚では、研究成果である「去勢肥育豚の夜間制限給餌」を実践しています。

□和牛のパドックで使うサイレージラックを自作しました。

給与ロスを軽減するため、他県の事例などを参考に、足場パイプ、クランプ、コンパネ、底用のワイヤーメッシュ等でラックを作成しました。(材料費約8万円)



ロールバールの端と柵の間隔を50cm以上にする事で、引き出しによるロスを低減できます。

底面両脇をテーパ状にすることにより、ロールバールは常に中心に位置します。

3 その他の対応策

□能力の低い乳牛は早めに廃用を判断し、適正頭数による飼養管理を行います。

□肉豚については、豚価市況と飼料価格、さらに繁殖成績などをこらみながら、

早期出荷を行い、差益が確保できるように努めています。

□養豚排水処理施設において、曝気槽内のpH、ORP、SV等を確認しながら適正な曝気量になるよう曝気時間を調整することで、電気代の削減につながりました。